伊藤家蔵データ

木造2階建て

· 建築面積:約20㎡ · 延床面積:約40㎡ · 壁 厚:約20cm

・乾 蔵:敷地の北西隅に配置

・平 面:4間×5間・棟方向:東西・出入口:南側平入

・備 考:内部には様々な調度品が保管

付録:実測資料

土壁に塗って何度か応急処置をしていました。なかなか上手にできないので、 何年かするとバサッと落ちてしまうんですが。

蔵の価値を再認識

困るのは、たまたま蔵があるというだけで金持ちだと思われてしまうことですね。うちの蔵にはいわゆるお宝の類はなく、いたって倹しく暮らしているのに、「大判小判が眠っているに違いない」というようなことをよく言われます。勘繰られたり、妙に羨ましがられたり、難儀なことです。

長年、単身赴任先と住吉を行ったり来たりの生活でしたが、3年前に定年になり、ぼちぼち蔵の中の「堆積物」を整理していこうと思っていると受ってうして蔵について取材を受けたり、お話を伺うようになってもからなるの価値を再認識している場所で「もう捨てよう」と思ってもう捨てよう」と思っておいた古いたがあたりましたが、できまとしては意外で驚きましたが、にそれでうれしいことですし、お役

に立てれば何よりと思っています。

位置的には通りに面しており、蔵が 邪魔になって間口を広げられないなど の不便はあるものの、今の私どもの暮 らしに蔵は欠かせないものなので、今 のところ潰そうと思ったことはありま せん。が、正直なところ、地域のため に蔵を残そう、という思いにまでは 至っていません。今後、「住吉の景観」 として蔵を残していこうという流れが できてくれば、協力していければと思 いますが、町並みとして蔵を残すので あれば、公の管理にした方がいいのか もしれませんね。



伊藤家蔵

蔵職人に聞く(屋根編)

住吉蔵部/竹山通明・材寄法子・曽我部千鶴美

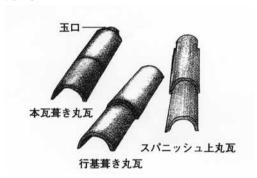
本瓦葺き屋根の変遷

住吉の蔵には、本瓦葺き屋根が多く見ら れる。「瓦」は588年(崇峻天皇元年)に 百済から僧や寺大工と共に瓦博士が来朝 し、596年(推古天皇四年)に法興寺(飛鳥寺) が造立された。このとき葺かれた瓦が日本 最初の瓦で、1400年以上の歴史がある。当 初は、平瓦と呼ばれる雨水を受けて流す谷 瓦と、その間をふさぐ素丸瓦(半円筒形の瓦) と呼ばれる山瓦の組み合わせで葺かれ「行 基葺き と呼ばれている。 法興寺が移築さ れたのが現在、奈良市にある元興寺で、行 基葺き瓦が残っている。行基葺きは本瓦葺 きの原型であるが、ヨーロッパの屋根に見 られるスパニッシュ瓦もルーツは同じようで、 シルクロードでつながっていたのではないか と思うとロマンが感じられる。



スパニッシュ瓦屋根:サン・ピエトロ大聖堂

行基葺きは、瓦の上に次の瓦をかぶせる 葺き方なので、ズレ易いことと形が好まれ なかったようで徐々にすたれたといわれてい る。 その後に、山瓦がズレないように改良されたものが「本瓦葺き」である。これは、山瓦の両端が同じ寸法で、接合部分が一回り小さな半円筒状(玉口)となっている。下から見れば重ねた丸瓦が一本の筒のように見える。



元興寺では下の写真のように両方の葺き 方をみることができる。



元興寺

江戸の大火と瓦の普及

寺社や城郭・武家屋敷などにしか使用を 許されていなかった瓦葺きが、民家に普及 したのは、江戸時代中期のことである。度 重なる大火に悩まされた江戸幕府により、草 葺きや板葺きが普通であった民家に、火除 け瓦として、屋根に平瓦を葺くことが許され